

大正七年八月一日發行

婦人と子ども

第十八卷  
第八號

フレーベル會

婦人と子ども 第十八卷 第八號 目次

|                      |       |
|----------------------|-------|
| 内外に於ける園間保育の施設状況に就て   | 生江孝之  |
| 幼児の自由選擇につきて          | 池田とよ  |
| 花の物語                 | 吉田力   |
| お伽話(黄金の林檎、魔法杖)       | ないとう生 |
| 第二十五回京阪神聯合保育會提出遊戯の歌曲 |       |
| 關の西より(二)             |       |
| 雜錄                   | 楓二子   |

# の一本日本幼年

本誌は、三歳から拾歳までの子供の爲め美しい繪と、面白い嘶とを、教育的に組み合せた他に比類なき繪雑誌です。殊に每號教育的な手技附録を添えます。

本誌は、玩具とお嘶しとの興味及び教育的價値を兼ねあはせたるもの、子供には何よりも喜ばれ、何よりもよき友達となる。

## 定 價

壹冊 拾二錢 □半年 郵稅共七拾五錢  
郵 稅 豈 錢 □壹年 同壹圓四拾四錢

御大典記念畫報婦人畫報  
族畫報少女畫報

日本幼年

(東京)京橋鍛冶橋外  
振替東京四九〇〇

東京社

# 顧問 平島三郎 先生



## 本誌の四大特色

片假名のみで讀易いこと

繪が町囃で美麗なこと  
お話が易しく面白いこと

まじめで教育的なこと

子供繪雑誌は玩具であると同時に教科書であります。お子様方がコドモを御覽になつてゐる間に物事を覚えお行儀がよくなること不思議な位です。



|         |         |          |          |         |      |
|---------|---------|----------|----------|---------|------|
| 大正五年六月號 | 大正五年五月號 | 大正四年十二月號 | 大正四年十一月號 | 大正三年七月號 | 合本出來 |
| までり     | より      | までり      | より       | より      | 第一集  |

|          |           |          |          |          |                      |
|----------|-----------|----------|----------|----------|----------------------|
| 同大正五年六月號 | 同大正四年十一月號 | 同大正四年七月號 | 同大正四年三月號 | 同大正三年一月號 | 東京市小石川區<br>林町五十七番地   |
| までり      | より        | までり      | より       | より       | 電話番町六一八<br>振替東京二七九六三 |

|          |            |               |               |         |          |
|----------|------------|---------------|---------------|---------|----------|
| □定價一冊十二錢 | □郵稅五厘      | □六冊郵稅共六十九錢    | □十二冊郵稅共一圓三十一錢 | □總て前金の事 | 各集郵稅共五十錢 |
| □郵稅五厘    | □六冊郵稅共六十九錢 | □十二冊郵稅共一圓三十一錢 | □總て前金の事       | □總て前金の事 | □總て前金の事  |

# 婦人と子ども

第十八卷 第八號 大正七年八月一日發行

## 内外に於ける畫間保育の施設狀況に就て

フレーベル會例會講演大要筆記

内務省嘱託 生江孝之

保育事業とは何か。私共の行つてゐる社會救濟事業の一部たる畫間保育事業の如きものも保育事業と言はれ得るか何うか、つまり私共の事業を保育事業といふことの適、不適は私は知りません。しかし兎に角私共の事業は現今の社會に於ては是非ともなくてはならないものであると思ひます。

畫間保育の必要な理由は二つあります。その第一は母親の保護を目的としてゐるといふことであります。この頃では各個人の私經濟は餘程苦しいものとなつて來て居ります。労力を他に提供して賃銀を得てゐる勞働階級などになると夫婦共稼ぎ

で二人とも真黒になつて働かねば一家の經濟を支へて行くことは出來ないのであります。喜ぶべき現象ではないかも知れませんが事實がさうなのであります。誠に止むを得ません。勞働者を雇ふものは資本階級であります、多くは世の富豪と目せらるゝ人々でありますから私共の救濟事業によつて援助を受ける必要のない人々であります、従つて、その意味に於てはこの階級は私共の事業とは没交渉であります。さて勞働者は悉く貧民ではあります。貧民に二種あります。社會貧と個人貧

が之であります。個人貧といふのは病氣のため働けないので貧乏であるとか飲酒癖の爲めに金が持てないとか浪費のために家計不如意であるとか言ふやうなものを指して言ふのでありますて専ら個人に係る理由によつて貧なるものを言ふのであります。社會貧といふのは得る所の賃銀が小額なるために自己及び家族を辛うじて維持するかしないかの状態にあるものを言ふのであります。この貧よりは如何にして逃るべきか又逃れさせべきか、これは専ら社會政策に俟つた他はないのであります。尤も社會政策は單に労働者を社會貧より救ふことのみを目的としては店りません。その他労働者全體の向上といふことが主なる目的となつて居るのであります。外國に於ては全労働者の四割五分乃至五割が辛うじて健康を維持し得るか又は得ないといふ状態にあるのでありますて大問題となつて居ります。日本では未だ詳しい調査が行き届いては居りませんのではつきりとしたことは分り

かねますが社會貧の數はそんなに多くはないやうであります。しかし労働階級には夫婦分れなどが随分多いのでありますて、強ち放擣のためばかりでないとあつてみれば彼等が貧に苦しめられて居るといふことは十分に推知されるのであります。

これは社會組織に缺陷があるから起つて來たことでありますて、十分に考究を積ねた上で順次改良策を講じて行かなければならぬのであります。がその内の一つとして出たのがこの貧児保育事業なのであります。即ち一家の主婦たるものは家庭にあつて調理を爲し子女の保育にあたるのが本當なのに、貧のために内職をすることになるのであります。然るに幼児があつてはこの内職も思ふままに爲すことが出来ません、夫婦のみなら共稼ぎもいゝのですけれども子供があると却々骨が折れる、乳飲み児があつては母親は到底内職をすることは出来ません。内職の邪魔になる子供に對して母親はその得る所のわづかな賃銀の中から小遣錢

をやりますので愈々内職の甲斐が渺くなります。

一日内職して夜業よなぐをして是等の人々の得る所は幾千でありますうぞ、子供に與へる小遣錢等を控除したならば残りはわづかに家賃の足しか夜食のお菜を買ふだけ位のことになりますまい。

これは家に在つて内職をする母親に就て言つたのでありますが、雇はれて外へ出て働く場合には更に困ります。四五歳位の子供なら彼等は家へ残したまゝ出掛けもしませう、しかしそれより小さい子供ですと親類へあづけるとかお婆さんに面倒をみて貰ふかしなければなりません。それでなければ二錢若しくは三錢位で餘處の少し大きい子供をたのんで来て面倒を見て貰ひます。以上のやうなわけで母親は子供のために十分に働くことが出来ません、又出來ても結果がおもはしくありません。保育事業は以上の如き下層の人々の不便を除くために營まれるものであります、母の保護と子の教養とに任ずるのであります。保育所の存在

は以上の如き事實に基くのであります。故にこの事業は言ふまでもなく消極的、慈惠的、社會的であります。幼稚園はこれに似寄つてはゐますが我がいふ保育事業に較ぶれば積極的であり、教育的色彩の豊かなものであります。しかし集めた子供に對してとる取扱法の上から言へば兩者の間には大した違ひはないのであります。しかしその起源は甚だ遠ふのであります。乳飲み児を預るなどといふことは幼稚園の方では絶対にしないことがあります。

保育所の沿革は長くなりますが、極く簡単に申上げますが、一體保育所の起源は今から丁度七十四年ほど前、一八四四年に佛蘭西のクリスチーフルマン、マルボーが創めて作つたのであります、この人は學校の先生であつたといふのと工場主であつたといふのと二説があります。二人の別の人なのかも一人の人なのかもよく分りません。とにかく一八四四年といふ年に巴里に保育所を設け十二臺

の寝臺を備へて生後數週間から二三歳位までの幼兒を收容したしました、このことはいたく時人の注意を喚起しました、詩人や文士などが口を極めて賞讃しました。未だ曾つて發見せられざりし唯一の事業であるなどといつてほめたものもありました。これによつても當時の社會が斯る事業を如何に必要としてゐたか分るのあります。而してその事業は忽ち普及して急速の進歩を遂げました。巴里のみでなく歐洲全土にひろがつたのであります。現今では巴里及びその近郊に百餘の保育所があります、歐洲全體では四百位あります。佛蘭西に於てもこの種の事業は私人によつて營まれてゐるものが多く政府なり市町村の公共團體なりが保護を加へ援助を與へて居ります。

工場保育所といふのも佛蘭西には設けられて居ります。これは工場主が自己の經營の一部として行うて居るのであります。佛蘭西は殊に嬰兒の保育に力を竭じます。それは佛蘭西の人口増加率

が少ないといふ事實に起因して居ることでありまして、「如何にして人口を増加せしむべきか」といふことは佛蘭西にとつては餘程以前から問題となつてゐたことでありまして戦後は殊にこの人口問題が重要視せらるゝに至るでせう、佛蘭西のやうに嬰兒の生産率の少い國にあつては何うしても生れた程の子供は皆育つやうに努めなければなりません。近頃では亞米利加や日本に於ても生産率がすこし減じて來たやうであります。佛蘭西の如き状態にある國に於ては嬰兒保護といふことは極めて必要なことになるのであります。それ故に佛蘭西では法律を以て労働をしてゐる母親は日に二回若しくは三回工場を離れて保育所へ行き自分の子供に乳を與へることを得せしめられてゐます。斯る便宜を與へることは大勢の人々が共同して働いて居る工場等に於ては極めて困難なことなのであります。が、嬰兒保護の目的からこのことが許されてゐるのであります。而して佛蘭西では母親が子供

に長くその乳を與へて居ると賞與を與へるのであります。とにかく斯くまでに嬰兒保護を必要とする佛蘭西に於て保育事業の起つたといふことは偶然ではないのであります。

次ぎには少しく獨逸に於ける保育事業の模様をお話しありませう。

獨逸では今から七十年許前、一八四九年に作られた保育所が始めての保育所でありました、今では全國に百三四十もありませうが、柏林だけに六七ヶ所を算します、その中で最も有名なのはオブ・スト・ビクトリア保育所でありまして、皇后陛下が親しく御監裁になつて居ります、私もこの保育

所を視察いたしましたがすべての點に於て非常に完備して居りました。こゝの特徴は保母を勤めてゐる方々が中產階級以上の人々であることあります。而して幹部以外の人々は皆無給であります。つまり高等女學校を卒業した人々が嬰兒の取扱法を學びに來てゐるのであります、二階には保母養成所があります、故に良家の子女が母親になる準備のためにこゝへ通ふのであります。

獨逸にも工場保育所があります。その他收穫時

保育所といふものがあつて、十人二十人の嬰兒を一ヶ月又は一ヶ月半に亘つて預る設備も出來て居ります。これは各地方にあります、農家の收穫時に於ける多忙を緩和するために設けられて居る設備であります。これは日本には未だ行はれて居りませんが日本にも斯る設備が欲しいと思ひます。

農家の忙しい間一人で放して置くことの出來ないやうな子供は寺へでも托したいと思ふのであります。地方へ行くと忙しくて子供の面倒を見てゐるヒマがなかつた爲めに幼兒に火傷をさせたり、池へ落ちさせたりする場合が隨分あるやうであります。

英吉利には倫敦に約七十の保育所がある外、全國にはあまりありません、これはイングランド・スクールがあるからでありますか。中央保育協会といふものがあつて増設に力を竭して居ります。

亞米利加には全國に五百程の保育所があります。紐育だけにも百位あります。衛生室、隔離室、浴室、健康診斷室、睡眠室等實によく手が届いて居ります。亞米利加では收容の際、申込があると先づ看護婦が行つてよく家庭の事情やその幼兒の健

康を調べて来ます。そしてその後に囑托醫は此報告を土臺にして仔細に検査して入れるべきものは入れるのであります。しかし十日なり十四日なり別室に入れて置いて無病ときまれば他の幼兒と一緒にするのであります。而してこの保育所は政府の許可を得て始めて經營することが出来るのであります。故に長く續けて經營して行くためには毎年許可を願はなければなりません、もし設備に不行届の點があれば許可を取消されて下ふのであります。

要するに嬰兒の取扱、保育事業等に關しては亞米利加が一番進んで居ります。

幼兒保育事業としては保育所以外にもう一つ幼兒預り所といふのがあります。英吉利や亞米利加に於ては嬰兒と幼稚兒とを一緒にして收容し、之を保育所と名けて居りますが、佛蘭西や獨逸では嬰兒と幼稚兒とを區別して夫々別に收容して居ります、斯くの如く嬰兒を含まぬものを特に幼兒預り所と言つて保育所と區別することになつて居ります。幼兒預り所は今から四十年程前當時佛蘭西

の一部であつたローレンスに創設せられました、これは百三十八年も前に貧兒救助の必要を認した小説を書いたり又自らその事に當つたりした彼の有名なベスタロッチの影響の下に出来たものであります。今では佛蘭西全體に幼兒預り所は三百位あります、獨逸には二千位あります。

英吉利にはインファント・スクールといふものがあつて幼兒預り所の役目をして居ります、しかしこれは内容外觀ともに幼兒預り所そのものとは異つて居ります。インファント・スクールは今から百八年前、一八〇〇年にロバート・オエンといふ人が自分の經營して居る紡績工場に附屬して設けたのが初であります。その後法律でインファント・スクール建設を強制しましたのでインファント・スクールに托されてゐる幼稚兒は六十萬位の數に上つたことがあります。是等は皆労働者の子でありまして朝の八時から午後の五時まで預るのであります。

外國のお話はこの位にしておいて、次ぎには少しく我國に於ける斯種の事業に就てお話し致しませう。(以下次號)(文責在記者)

# 幼兒の自由撰擇につきて

東京女子高等師範學校  
附屬幼稚園保姆 池田とよ

一、自由撰擇は幼兒をして其意の向ふ所に従ひ其

製作結果の如何を決して問はず、遊び其物に本

真剣たらしめんが爲に企しものにして外遊、畫

方、積木、排方、豆細工、摺紙、縫取、織紙、(粘土は  
整頓上其性質を異にせるを以て省きたり)につ

き絶對に幼兒の自由撰擇に任せたり。

一、其方法としては室外に之等の凡てを準備し置  
き幼兒をして隨時、其欲する其材料を取らしめ  
定められたる各兒の席にてなきしめ、同一の材  
料のもの、みを一机に纏むるが如きことをなさ  
ず、即ち周圍の如何に關せず己の撰びしものに

注意を集注せしむる習慣を得しめんが爲なり。  
一、自由撰擇の度數を成べく多からしめんとせし  
も種々なる關係上、意の如くならず、又此記載は  
單に十二月十一日より同十九日の間に於ける僅  
か七回に涉りしものにして、且つ其記載には大  
に注意を拂ひしも多人數に關することゝて、殊  
に繼續時間記載に於て不正確にして、記載洩等  
あり、然し大體の傾向を知るを得べく不正確な  
るは其儘を記す、又表中の數字は凡て實數を表  
はせり。

第一表

|    |      |      |      |      |
|----|------|------|------|------|
| 畫方 | 增永   | 丈夫   | 山口博  | 田中寅中 |
| 八  | 山口博  | 田中寅中 | 豊志治村 | 木下謹  |
| 四  | 田中寅中 | 豊志治村 | 木下謹  | 三下   |
| 三  | 豊志治村 | 木下謹  | 小盛   | 廣松   |
| 二  | 木下謹  | 大澤五郎 | 大澤五郎 | 柳    |
| 六  | 大澤五郎 | 柳    | 清増   | 田    |
| 一  | 柳    | 田    | 三    | 山莊輔  |
| 三  | 清増   | 山莊輔  | 山本   | 本    |
| 二  | 田    | 本    | 忠棟   | 方    |
| 四  | 山莊輔  | 方    | 信良   | 櫻田   |
| 三  | 本    | 櫻田   | 精武   | 彦立   |
| 五  | 忠棟   | 精武   | 立今   | 村    |
| 二  | 信良   | 立今   | 郎誠   | 柴爾   |
| 五  | 櫻田   | 村今   | 田誠   | 早川   |
| 五  | 精武   | 柴爾   | 雄滋   | 計    |
| 六  | 彦立   | 早川   | 雄滋   |      |
| 七  | 立今   |      |      |      |

| 第三表 |      |   | 第二表                        |   |   |   |   |   |   |   |   | 第一表                                       |   |   |
|-----|------|---|----------------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|     |      |   | 男兒                         |   |   |   |   |   |   |   |   | 男兒  |   |   |
|     |      |   | 多及大間繼<br>(ビ最ノ續時<br>分)最最小最時 |   |   |   |   |   |   |   |   | 間繼其數セチノテ日ヨ第<br>(續レ及シ撰手幼ニリ一<br>分時ノビ回擇工兒於各日 |   |   |
| 最   | 最    | 最 | 第                          | 第 | 第 | 第 | 第 | 第 | 第 | 第 | 第 | 外   | 織 | 縫 |
| 多   | 小    | 大 | 七                          | 六 | 五 | 四 | 三 | 二 | 一 | 日 | 日 | 工   | ノ | ノ |
| 畫方  |      |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 手   | 自 | テ |
| 雅小五 | 子瀧   |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 技   | テ | テ |
| 達森三 | 子谷   |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 手   | シ | テ |
| 缺席五 | 泰嫡木  |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 同   | ニ | テ |
| 祥齋二 | 子藤   |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 數   | 兒 | ニ |
| 恒中五 | 子山   |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 回   | 外 | 積 |
| 壽櫻二 | 賀井   |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 間   | 織 | 豆 |
| あ高五 | や島   |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 時   | 縫 | 細 |
| あ宮二 | や永   |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 數   | 摺 | 排 |
| 梅岡四 | 照    |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 回   | 遊 | 方 |
| 千奈二 | 代佐   |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 間   | 紙 | 木 |
| 吳芳八 | 江    |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 時   | 取 |   |
| 缺席五 | 喜岩代崎 |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 數   |   |   |
| 林あ二 | い    |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 回   |   |   |
| す井三 | ゑ口   |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 間   |   |   |
| ひ堀三 | で手内  |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 時   |   |   |
| 計四  |      |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | (數回)                                      |   |   |
|     |      |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 全   |   |   |
|     |      |   |                            |   |   |   |   |   |   |   |   | 體   |   |   |

## 第四表 女兒

| 七日間三<br>ノ自由二<br>ル手技シタ<br>工ノ回數外<br>織縫摺豆細<br>遊紙取紙方木 |
|---|
| 五三一   |
| 七一  |
| 一   |
| 七   |
| 五   |
| 二二一   |
| 九   |
| 九一  |
| 七二一   |
| 六三一   |
| 一五二   |
| 一   |
| 九   |
| 七一  |
| 九   |
| 夷元五三一六  |

| 及人間継<br>(分)最長ノ<br>多小最時 | 時繼其數セノテ日コ第<br>ノ續レ及シ操作手幼ニリ<br>分間ノビ回擇丁兒於各日 |        |          |       |          |
|------------------------|--|--------|----------|-------|----------|
| 第一                     | 第二                                       | 第三     | 第四       | 第五    |          |
| 最<br>多                 | 最<br>小                                   | 最<br>大 | 第一       | 第二    | 第三       |
|                        |  |        | 二        | 三     | 四        |
|                        |  |        | 18       |       |          |
|                        |  |        | 20       | 10 27 | 24       |
|                        | 10                                       | 60     | 13       | 30 38 | 60       |
|                        | 30                                       | 40     |          | 30    | 40       |
|                        | 1  | 1      |          |       |          |
|                        | 25                                       | 30     | 30       |       | 25       |
|                        |  |        | 一        |       | 一        |
| 40                     | 5  | 45     | 40 45    | 23 15 |          |
| 30                     | 30                                       | 60     | 30 30    | 60 40 | 1 1      |
|                        |  |        | 三        | 二     | 一        |
|                        |  |        | 28       |       |          |
|                        |  |        | 30 25    | 15 20 | 40       |
|                        | 40                                       | 15     | 35 25 40 | 65 40 | 20 24    |
|                        | 25                                       | 35     | 33 25    | 35    | 1 28     |
|                        | 20                                       | 20     | 30 37    | 20    | 1 20     |
|                        | 30                                       | 20     | 20       | 25 25 | 40 30 30 |
|                        |  |        | 十一       | 二     | 三        |
|                        |  |        | 10       |       |          |
|                        |  |        | 25       |       |          |
|                        | 30                                       | 10     | 20 30    | 15 25 | 35 22    |
|                        |  |        | 1 30 30  | 20 25 | 35 30    |
|                        | 1  | 1      |          |       |          |
|                        | 20                                       | 85     | 1 55     | 1     | 85 20    |
|                        |  |        | 一一       | 二     | 一        |
|                        |  |        | 35       |       |          |
|                        | 35                                       | 20     | 35 30    | 50    | 55 1 68  |
|                        |  |        | 1 三      | 一     | 一        |
|                        | 15                                       | 30     | 1 15     | 1 20  | 1 17     |
|                        | 30                                       | 5      | 85       | 六     | 云五八三云四   |

一、第一表、第三表は遊びの各種につきて各兒の之を撰擇せし回數を示せるものにして、之を横に比較することを得るも縱に比較することを得る

す、如何となれば文字は凡て實數を表すものにして幼兒の中には其日によりて缺席せしものあるを以てなり。

第二表第四表は第一日より第七日迄の間に於て幼兒の手工手技を選擇せし回數及其時間を其によりて表はせしものにして比較法は第一表第三表に同じ。

一、第一表、第三表に於て各遊びにつき選擇せられし度數及順序左の如し(縦に比較するを得ず)

|              |    |   |   |   |                |                       |                          |                          |                       |                  |                       |                  |                       |                  |                       |                  |
|--------------|----|---|---|---|----------------|-----------------------|--------------------------|--------------------------|-----------------------|------------------|-----------------------|------------------|-----------------------|------------------|-----------------------|------------------|
| 男<br>児<br>最多 | 最大 | 金 | 五 | 三 | 児女<br>最大<br>最多 | 織紙<br>外遊<br>豆細工<br>縫取 | 男<br>児<br>積木<br>排方<br>摺紙 | 女<br>児<br>積木<br>縫取<br>摺紙 | 外遊<br>外遊<br>豆細工<br>縫取 | 一<br>二<br>三<br>四 | 外遊<br>外遊<br>豆細工<br>縫取 | 一<br>二<br>三<br>四 | 外遊<br>外遊<br>豆細工<br>縫取 | 一<br>二<br>三<br>四 | 外遊<br>外遊<br>豆細工<br>縫取 | 一<br>二<br>三<br>四 |
|              |    |   |   |   |                |                       |                          |                          |                       |                  |                       |                  |                       |                  |                       |                  |
| 児<br>最小      | 最大 | 金 | 五 | 三 | 児女<br>最小<br>最多 | 織紙<br>外遊<br>豆細工<br>縫取 | 男<br>児<br>積木<br>排方<br>摺紙 | 女<br>児<br>積木<br>縫取<br>摺紙 | 外遊<br>外遊<br>豆細工<br>縫取 | 一<br>二<br>三<br>四 | 外遊<br>外遊<br>豆細工<br>縫取 | 一<br>二<br>三<br>四 | 外遊<br>外遊<br>豆細工<br>縫取 | 一<br>二<br>三<br>四 | 外遊<br>外遊<br>豆細工<br>縫取 | 一<br>二<br>三<br>四 |
|              |    |   |   |   |                |                       |                          |                          |                       |                  |                       |                  |                       |                  |                       |                  |
| 體<br>全<br>最多 | 最大 | 金 | 五 | 三 | 児女<br>最小<br>最多 | 織紙<br>外遊<br>豆細工<br>縫取 | 男<br>児<br>積木<br>排方<br>摺紙 | 女<br>児<br>積木<br>縫取<br>摺紙 | 外遊<br>外遊<br>豆細工<br>縫取 | 一<br>二<br>三<br>四 | 外遊<br>外遊<br>豆細工<br>縫取 | 一<br>二<br>三<br>四 | 外遊<br>外遊<br>豆細工<br>縫取 | 一<br>二<br>三<br>四 | 外遊<br>外遊<br>豆細工<br>縫取 | 一<br>二<br>三<br>四 |
|              |    |   |   |   |                |                       |                          |                          |                       |                  |                       |                  |                       |                  |                       |                  |

一、第二表、第四表に於て其繼續時間の最大、最小、最多次の如し。(単位、分)

一、自由選擇は幼兒をして絶対に自由ならしめしものにして各兒其意に従ひて選擇し、全く自己の興味を中心として他を顧慮することなく其欲する所に向ふが故に、本真剣なる心の態度を養ひ得る點に於て效果あり、然れども注意すべきは設備と人數とにあり、隨時、隨意の材料を選擇するにあれば多少の混雜は免れざるも、之をして成べく小ならしむる方法を講せざるべからず殊に机は成べく小にして各兒の欲する場所に自ら運び、他の妨害を避けて静かに落付きてなす様にせば一層よろしからん。人數多き時は混雜しやすく、注意亂れやすきを以て、自由選擇の時、室内に於て手技手工をなさんとするもの餘りに多き時は適當の方法を以て少人數となす必要あり。

又自由選擇の場合にありては他の場合に比して指導に困難なり。

# 花の物語

國定教科書捕畫事務囑託

吉田 力

花の物語といふのは色々の花が子供になつてそれぐに自分自身を語り出す所のお伽繪話であります、さて草木の花を愛して樂むといふことは古今東西を通じて大人も小供も同様であります、總て幼兒が花に對するの愛着は又格別であつて其の花と共に無我無心になる所に所謂自然の審美が宿り且つ此れより來る教育的思想涵養の利益は至大至廣であることは申す迄もないのであります。

今花の物語と題したる一種のお伽繪話を世に公にする所以のものは彼の色々の花と幼兒との關係を極く趣味ある方法のもとに幼兒教育上にまで適切有效たらしめんといふ希望でありまして私が從來幼稚園用掛圖類に研究を加へたるものゝ中の一つであります、理論としても亦實際から視ても頗

る面白いものと思ふのであります。

日本でも外國でも廣く繪入りのお話が歓迎されることは事實が既に證明して居ますが彼の幼稚園児の頭腦に科學上の知識を眞面目に説明して徒らに理解に苦ましめるなどは害があつて益のないことをですから花物語の如きも幼兒の愉快なる興味心に投合して其の語彙を覚えしめ又形や色などの自然美から知らず識らずの間に觀察力や想像力などを精密に且つ旺盛に發達せしめ得て其處に眞の教育の効果を擧げるといふ方法でありますから此の花の物語で彼の花の種類をそれぐ男女の幼兒に凝し春の櫻は一重を男、八重を女、夏の菖蒲は男秋の菊は白と黃を男で赤を女、冬は山茶花、水仙といつた様に圖畫と談話で面白く眼と耳とより来る各

種の快感を併せ得しむる事となし、幼児の自動力を程度としたるお伽繪話の妙味を十分に味はせたいのであります。

美しい花其物が可愛い幼兒となつて自分の身の上話ををするのですから其の話をして居る間に愉快にお伽話的興味を増進して一面其話の主人公をして十分に活躍させることが出来るのだから先づ主要なる四季の花物語から初めて漸次西洋草花類の名稱特色までも容易に幼兒達の脳底にまで沁みこましめることが出来るのであります。

今簡単に其一例を申しますと先づ此れから季節に向く物で亞米利加等の各幼稚園で所謂キンダーガーデンフランговорと呼ばれて大に愛玩されて居る彼の雛菊の花の物語(圖畫を略す)とすれば其の可憐なる雛菊の花が可愛い女の児になつて自分の性情や境遇や歴史やらを面白く物語るのであるからして其花の實際の觀察から来る所の理智の啓發は勿論として此れに要する材料にはなるべく實物を見せ又其花の寫生畫を活用して、さて其花の栽培せられたる光景を背景となしたる掛圖中へ其花

の精ともいふべき幼兒を描き雛菊模様の被服で適應の姿をして居る美しい所を開すれば彼此相俟つて忽ち興味律々たるお伽繪話の花物語となるのであります、即ち視官から來るお伽繪話の花物語となる美感と聽官から起る快感とを十分に發揮させることが出来て斬新なる趣味豊富のお伽話となるのであります。

斯くて實物の觀察力から種々の想像力も發達され得るばかりでなく其間に於いて實物と寫生畫より来る所の美的修養ともなり且又繪畫の模様化されたり圖案化されたりする所に藝術的妙趣をも會得せしむる事になるのであるから其配合や變化やらで一舉にして活きたるお伽繪話と成るのです。此様なる希望目的からして此種の新案お伽繪を幼稚園及家庭用として掛圖或は小冊子となすことにして季節に應じて續々活用するとなれば多數の幼兒に接しての實驗から又彌々此れが研究を重ね益々改善を加へることも出来ると信じますので私は特に此處に完成に先ちて以上の希望と實用の一般を申述べたる次第でありますから大方諸氏の御批判をも歓迎して過まぬものであります。

## 黄金の林檎

ないとう生

三吉はお父様もお母様も無い、可愛さうな子供でした。街はづれの古ぼけた小屋にたつた一人で住んで居て、毎日人の使ひをしたり、畠の仕事を手傳つたりして、僅なお金を貰つて淋しく暮らし居ました。

或る日、三吉は儲けたお金でパンを一斤買つて街から歸つて來ると、道傍に一人の瘦せこけた老人が、がつかりして蹲んで居ます。

三吉はその老人が可愛さうに思はれたので、『もし／＼御老人、何うしたんです』と尋ねますと、老人は苦しさうな聲で、

『私は貧乏なものですから、今朝から何も食べません。苦しくつて死にさうです』と答へました。

三吉は親切な子でしたから、それを聞くとすぐ自分のパンを皆出して、『さあ、これをお食べなさい』と云ひました。老人はうれしさうに御辭儀をしましたが、

『けれどもこれを皆食べては、あなたが困るでせう』と云ひました。三吉は、

『私は今朝もパンを食べましたから、晩は食べなくつても構は無い。御老人は今朝から何も食べ無いた。老人は涙を流してお禮を云つて、甘さうに皆食べてしました。

『あゝ御蔭で腹が一杯になりました。ほんとにあなたは親切な方ですね。御恩返しに私が善い事を

敷へて上げませう。これから先他人が何んな事を

云つても只ハイ／＼と素直にその云ふ通りにおなりなさい。何んな無理な事を云はれても、逆らつてはいけません。さうすればきつと出世するに相違ありません。私の云つた事をよく覚えてお置きなさい』と云つてその老人はトボ／＼と何處かへ行つてしまひました。

三吉はその晩のパンを食べ無かつたけれど、善い事をしたと思ふと嬉しくつてお腹も空きませんでした。翌朝、三吉は近所の或る金持の庭掃除に雇はれました。一日一生懸命に働いてやつと仕事が済むと、その金持がやつて来て云ふには『お前は未だ子供で一人前の仕事が出来無いから、お金をやるわけにはいか無い。その代りにこれをやる』とたゞ一つの林檎を呉れました。三吉は折角骨を折つて働いたのに、あんまり酷いと思ひましたが昨日の老人の詞を、思ひ出して、素直にその林檎を貰つて来て食べました。さうして種を取つて袋

へ入れて置きました。

翌日三吉は自分の庭へ畑を作らうと思つて鍬で地面を掘つて居るとカチリと何か鍬の先へ當りました。何んだらうと思つて掘り出して見ると真黒な壺でした。大變重さうなので中を開けて見るとまあ何うでせう。寶石が一杯這入つて居るのではありませんか。三吉は夢では無いかと喜びましたするとそこを通りかゝつた例の金持がそれを見つけました。その金持は大變慾張りだつたので、三吉の手に入つた寶が欲しくつて堪りません。そこでわざとニコ／＼しながら三吉の所へやつて来て『やあ、君は素敵な物を見付けたね。何うだ一つ私の持つてる寶物と取り代へつこしないかね』と云ひました。三吉は『何と取り代へるのでですか』ときますと、金持は『それよりもつと大きな壺に這入つて居る金貨と取り代へやう』と云ひました。三吉も寶石より金貨の方が欲しかつたので、ウツカリ取り代へる約束しました。

『それではその壺を持つて私の家へお出で』と金持が云ひますので、三吉はそれを持つて金持の邸へ行きますと、金持は固く蓋をした大きな壺を呉れて、その寶石を取り上げてしまひました。

三吉は定めし金貨が這入つて居るのだらうと急いで家へ歸つてその壺の蓋を取つて見ると、まあ何うでせう。中には魚の腸が一杯つまつて居ました。さては欺されたかと三吉はすぐ金持の所へ談判に行きましたが、金持は却つて散々に三吉を悪口して、果ては家來に云ひつけて三吉をひどい目に合はさうとします。三吉は口惜しくつて堪りませんでしたが、この間の老人が『何でも素直にしろ』と云つた詞を思ひ出して何にも云はずに歸つて來ました。さうして魚の腸も何かの役に立つだらうと思つてそのまゝ取つて置きました。

或る日三吉が街の方へ行かうとする途中、『おい／＼』と誰か後から呼ぶ者があります。見ると人の男が重さうな袋をかついで立つて居ますので

三吉は『何か御用ですか』と聞きますと男は『この麥袋を街のお醫者様の所へ届けてくれないか』と云ひます。三吉は、

『御安い御用ですが、賃金はいくら下さいますか』ときりますと男は『賃金は先のお醫者様の方で費らつてくれ』と云つて無理にその麥袋を三吉の肩へのせてドン／＼行つてしまひました。三吉は随分酷い男だと思ひましたが、例の老人の詞を思ひ出して、黙つてその重い麥袋をかついで街の方へ歩き出しました。その日は大變暑うございましました。三吉は汗を流してやつとの事で街のお醫者様の所へ着きました。御醫者は『やあ御苦勞々々』と云つて袋を受け取りましたので、三吉は使ひ貰を下さいと云ひますと、醫者はさも氣の毒さうに、『實は私は貧乏で君に上げるお金が無い。その代り君の體を療治してやらう』と云ひます。

三吉は情無くなつて『私はどこも病氣の所はありません。それより賃金を下さいまし』と請求し

ましたが、醫者は金が無いからと云つてくれません。三吉はもつと云ひ張らうと思ひましたが、例の老人の詞を思ひ出して仕方が無いとあきらめました。そこでお醫者様に向つて云ふには、『では使ひ貢はよろしうございますから、私の耳を掃除して下さい。耳が詰つてこります』

醫者は喜んで三吉の耳の穴を綺麗に掃除して、さて云ふには『サテサテ、君は感心な子供だ。何と云ふ素直の子だらう。御禮にいゝ物を上げやうこれは使ひ貢よりきつと君を喜ばせるよ』と一つの藥壇を取り出しました。さうしてその藥を三吉の耳の中へ注ぎ込みました。

羽の雀が話し合つて居るのであります。三吉はビックリしました。さては今の藥のお蔭で雀の詞がわかるやうになつたかと大喜びで少し行くと、今度は蠅の話がきこえます。鳥の話もわかります。三吉は面白くつて堪りません。あつちへ行つては犬の演説をきいたり、こつちへ行つては金魚の内密話を立聞きしたりしました。やがて段々街の眞中へ來ると大きな立札が立つて居て、大勢の人がそのままに集つて居ます。何だと思つて三吉は近づいて見ると、それはかう云ふわけでした。

その國の王様のたつた一人のお姫様が大病で死にさうです。澤山の醫者が療治しましたが治りません。もし誰でもお姫様の病氣を治したらお智さんにすると言ふ御ふれが出来ました。美しいお姫様の智にならうと、いろいろな人が来て療治しましたが治りません。街の人々は皆心配さうにひそひそと語り合つて居ました。三吉はとても自分の力には及ばぬ事だと思つて池の所へ来ました。大變

涼しかつたので池のふちへゴロリと寝ますと、やがて二匹の鯉がボツカリと水の上に浮び上りました。

三吉は鯉が何を云ふかと耳をすまして聞きますと、一匹の鯉が云ふには、

『ねエ君、人間は何と云ふ馬鹿だらう。たつた一人のお姫様の病氣が治らないつてあんなさわぎをして居るのだもの』するともう一匹の鯉が『ほんとうにね、黄金の林檎さへ食べればすぐ治るんだのに』と云ひました。三吉はこれはいゝ事をきたと思ひましたがさて黄金の林檎が何處にあるかわかりません。

そこで鯉にきかうと思つて飛起きますと鯉はビックリして水の中へ沈んでしまひました。それつきりいくら待つても出て来ません。仕方がないから段々と自分の家の方へ歩いて行きますと、途中に大きな榎が一本茂つて居ります。その木陰が涼しそうなので三吉はそこへ腰をおろしますと、そ

の榎の根元で何か聲がきこえます。よく見ると二匹の野鼠が話し合つて居るのです。

『君。君は何でも知つてると自慢するが、黄金の林檎の作り方を知つてゐるかい』と一匹の鼠が云ひますと、一匹は『いや知ら無いよ、君は知つてゐるか』ときりますと、先の鼠は得意さうに、

『何。わけは無いさ。たゞの林檎の種を蒔いて魚の腸を肥料にして、それから唄を唱ひながらその上を二度踏めば一晩で黄金の林檎が出来るよ』

『へエ、どんな唄をうたふんだね』ともう一匹がきりますと、一匹の鼠はいゝ聲でかう唱ひました。  
黄金の林檎よ。生つとくれ。

黄金の林檎が生つたらば

お姫様はお喜び。

翌日の朝のお日様の

光をあびてキラキラと。

黄金の林檎がキラキラと。

それをきいた時の三吉の喜びは何んなでしたら

う。三吉は大急ぎで家へ歸つて、この間金持から貰つた林檎の種を庭へ蒔きました。それから例の壺の中から魚の腸を出してそれを肥料にやつて、さて野鼠に教つた通り『黄金の林檎よ生つとくれ』と唱ひながら、種を蒔いた上を三度踏んで置きました。翌朝何うしたかと思つて庭へ出て見るとまあ驚くちあありませんか。一本の見事な林檎の樹が青々とした葉を茂げらせ、その葉の中に、ゴム鞠ほどの大きさの黄金の林檎が、朝日を浴びてキラキラと輝いて居ります。三吉は大喜びで其黄金の林檎を取つて大急ぎで街へ行きました。さうしてきつとお姫様の病を治すと申しますと、王様の家來は三吉が汚い子供なのを見てその詞を信じません。三吉は何卒御姫様に逢はしてと願ふと家來は

『よし。そんならお姫様にお取次するが、もし病氣を治す事が出來なかつたら、貴様の命を取るぞ』と云ひます。

三吉はそれでも構ひませんと云ふと、お姫様の病室へ案内されました。見るとお姫様は青い顔をして糸のやうに瘦せて居らつしやいます。三吉は直ぐその林檎をお食べ下さいとさし上げました。

お姫様は甘さうに黄金の林檎を召上がると、これは不思議、忽ち顔色が赤味を帶びて來て、今まで寝て居たのに、元氣よく床の上へ起き上がつてニコニコとお笑ひになりました。お姫様の御病氣はすつかり治りました。

三吉は約束通り、お姫様のお智様になり、その後國王になりましたとさ。

## 魔 法 杖

昔ある所に一人の木樵が居りました。妻が死ん

で二人の息子と暮らして居りましたが大變貧乏で

した。ですから木樵はいつも金が欲しいと思つて居りましたが中々金の儲かる仕事もありません。或る日いつもの通り木樵は斧をもつて山へ木を切りに行きました。高い木の上に上つて枝を折つて居ると向ふから奇妙な男がやつて来ました。其男は眞赤なダブ／＼の着物を着て、同じく眞赤な尖帽を冠つて手には一本の杖をついて居ます。杖は黒い木で出来て居て握手の所に蛇の首が刻つてありました。男は目が氣味悪く光つて、鼻が鉤のやうに曲つて居ました。何者だらうと思つて見て居ると、それと反対の方から一人の旅人がまわりました。二人は丁度木樵の居る木の下ですれ違ひました。その時奇妙な男はいきなり杖を上げて『驅馬になれ』と云ふと共に旅人の肩を杖でバツと打ちました。するとこれは不思議!! その旅人が立ちすくむと思ふとバタリと前へのめつて忽ち驢馬になつてしまひました。奇妙な男はそのまま、驢馬に乗つて何處かへ行つてしまひました。木樵は大

變驚いて飛ぶやうに我家へ歸つて右の事を息子に話しました。息子は『お父さん。そりあきつと魔法つかひだよ。その杖は魔法杖に違ひ無い。そんな調法な杖があつたらどんなにうまい事が出来るだらう。欲しい物だねエ』と云ひました。

翌日、木樵は又昨日の所へ行つて木を切つて居ると又向ふから魔法つかひが赤い衣物を着てやつて来ました。見つかつたら大變だと早速木の上にのばつて見て居るとそこへ一人の百姓がやつて來ました。魔法つかひと百姓とがすれ違つた時、魔法つかひはいきなり『鶏になれ』と云つて杖で百姓を打ちました。と百姓は忽ち一羽の鶏に變つてしまひました。

魔法つかひはすぐとその鶏の首をしめて殺してしまひ羽根をむしりました。それから落葉や枯枝を集めて火をつけて、その鶏をあぶて甘さうに、ムシャ／＼と食べ終るとそのまま、何處かへ行つてしまひました。

木樵はビックリしました。昨日の旅人は只驢馬になつただけだからよいが、今日の百姓は鶏にされた上殺されてしまつた。はてさて恐ろしい事だとふるへながら家へ歸つてこの事を話しました。すると長男は慾張りな男でしたからその杖が欲しくつて堪りません。次男も同じやうにづるい男でしたからその杖を取り度いものだと思ひまして、兄弟二人して親父の木樵にその杖を奪ひ取れとすみました。木樵は驚いて『馬鹿な事を云つてはいけない。相手は魔法つかひだもの。うつかりした事をすれば殺されてしまふ』と云ひました。

すると息子達は『何、お父さん。いゝ方法があります』と云つて何やらヒソ～とさゝやきますと木樵は『ウン。それはよからう。一つためしにやつて見やう』と受け合ひました。

翌日、木樵は瓶の中へお酒を一杯入れて眠薬をませて、それをもつて例の場所へ行きました。さうして木の根元へその瓶を置いて自分は木の上へ

木樵は『しめたぞ』とすぐく木から下りて、そつとそばへ寄り寝息をうかゞひ、そろ／＼魔法つかひの手から杖を取りにかかりました。首尾よく杖を取り上げたそのとたん、急に魔法つかひは目を開けました。と急にとび上つて『おのれ、盜人奴』と云つてつかみかかりました。木樵はビックリしたがもうおそい、かうなるからは進むより仕方が無いと、いきなり魔法杖をふり上げて魔法つかひにとびかゝり『岩になれ』と叫ぶと共に、バ

上つて様子を見て居りますと、そこへ例の魔法つかひが魔法の杖をもつてやつて來ました。木のそばへ來ると急にブン／＼と鼻をひとつかせて居たが、瓶を見ると急にかけよつて中をのぞきました。それからニコ／＼し乍ら首をつつこんでガブ／＼とお酒を飲みはじめました。すつかり飲み切ると真赤な顔をしてフラ／＼と歩き出しが、急にそこへバタリとひつくり返つてグウ／＼寝てしまいました。

木樵は『しめたぞ』とすぐく木から下りて、そつとそばへ寄り寝息をうかゞひ、そろ／＼魔法つかひの手から杖を取りにかかりました。首尾よく杖を取り上げたそのとたん、急に魔法つかひは目を開けました。と急にとび上つて『おのれ、盜人奴』と云つてつかみかかりました。木樵はビックリしたがもうおそい、かうなるからは進むより仕方が無いと、いきなり魔法杖をふり上げて魔法つかひにとびかゝり『岩になれ』と叫ぶと共に、バ

ツと魔法つかひの肩を杖の先でなぐりつけました  
するとこれは不思議!! たちまち魔法つかひの體  
はバツタリ倒れると共に真黒な岩になつてしまひ  
ました。

(二二)

首尾よく魔法杖を手に入れた木樵は大喜びで家  
へ歸りました。息子二人も喜んで『これからはこ  
の魔法杖をつかつて一つ金儲けをしやう』と親子  
でよくない事を企てました。

それから木樵は毎日山へ出かけて通りかゝる旅  
人や百姓を魔杖で打つて牛や豚や羊に變へました  
さうしてそれを市場へ賣つて段々お金を儲けまし  
た。しかし誰もこの木樵がそんな不思議な杖を持  
つて居て、そんな惡事をするとは思はなかつたの  
で、木樵は益々魔杖をふるつて人を獸にして金を  
儲け、毎日酒を飲んでは馳走を食べて親子して贅  
澤をして居りました。所がとう〜悪事のむくい  
が來て大變な事が出來ました。或る日親父の木樵

が酒を飲んで居る所へ、同じやうに醉つぱらつた  
長男がやつて來まして『お父さん。少しお金を下  
さい』と云ひました。親父はあんまり度々息子が  
金をくれと云ふので大變立腹して『お前はまあ何  
度金をくれと云ふのだらう。もうお前にはやれな  
いよ』と云ひますと、長男は『でも魔法杖の御蔭で  
あんなにお金を儲けたくせに少しくれてもいいだ  
らう』と云ひ張つて、はては醉つたまぎれに親子  
二人は口汚く罵り合ひました。とう〜親父は醉  
つてゐ上に腹立ちまぎれに『エ、貴様のやうな  
親不孝な奴は、いつそ豚になつてしまへ』とどな  
つていきなり杖で息子の肩をバツとなぐりました  
所がその杖が例の魔法杖だつたから堪りません。  
バツタリと前へのめると共に、長男はたちまち一  
頭の豚になつてしまひました。親父の驚きは何ん  
なでしたらう。酔ひも醒めて眞つ青になつてしま  
ひました。酔つたまぎれに大切な息子一人を豚に  
してしまつたのですもの、何うしたら元の人間に

かへす事が出来るかと試に『人間になれ』と云ひながら魔杖で豚を打つて見たが人間にはなりません。仕方が無いからその豚を豚小屋に入れて置きました。

或る日大變雪が降りました。その暮方一人の年老いた順禮が木樵の家へやつて来て『宿を貸して下さい』と頼みました。木樵はこの順禮を一つ獸にして賣つてやらうと思ひわざと丁寧に『お安い御用です、何卒御泊り下さい』と云つて親切に待遇しました。やがて御飯も食べ終へて順禮は机に向つて何か書き出しました。隙をねらつて居た木樵はそつと順禮の後へまはり、彼の魔法杖をふり上げて、『羊になれ』と叫ぶと共にバツと順禮の肩を打ちました。所が何うした事か羊になりません。肩をたゝかれた老人はびっくりして振り向いて、『何をする』ときります。この順禮は聲だつたので『羊になれ』と云つたのがきこえなかつたのです。木樵は順禮に『蠅が肩へとまつたから打つた

のだ』と手真似で話してごまかしました。それでも何故順禮が魔杖に打たれても羊にならなかつたのでせう。それは順禮の胸に金の十字架がかけてあつたからです。神の御しるしの十字架の爲に魔法も役にたゝなかつたのです。さう氣がついて木樵は何うかしてあの十字架をはづさしてしまはうと思つたが中々出来ません。それでは此順禮を寝かしてしまつてから、そつと奪ひ取らうと決心して順禮を寝床へ案内しました。順禮の床の隣には木樵の次男が寝ました。夜中に次男は目を覺ますと寒つて堪りません。そこで隣に寝て居る順禮が頭巾を冠つて居るのを思ひ出して、そつと手さぐりで順禮の頭巾を取つて自分の頭へ冠りました。それから順禮が毛皮をかけて居たのを思ひ出して、それも取つて自分でかけました。さうして又グーグー寝てしまひました。そこへ木樵が忍びこみました。寢室は眞つ暗ですが燈をつけて順禮が目をさましてはならぬと暗がりを手さぐりで魔

杖を握つたまゝ、そろくと寝床へ近りました。

び出してしまひました。

けれど何處の寝臺へ順禮が寝て居るかわから無いのでそつとさぐつて見ると次男の頭の頭巾が手にふれました。そらから體をさぐると毛皮がのつて居ます。もうこれが順禮に違ひ無いと思つてそつと胸をさぐつたが例の十字架がありません。きつとはづして寝たのだらう。それならば何よりだといきなり魔杖で肩をバツと打つて『羊になれ』と云ひました。と急にムクくと何やら起き上つた様子なので急いで燈をつけて見ると一匹の羊が寝臺の上に居りました。木樵は大喜びで隣の順禮を

がつかりした木樵は暫くじつと考へて居ましたが、やがて『おゝ、誤とは云ひながら二人の息子を獸にしてしまつたのも、今まで大勢の人を獸にした罰だらう。俺は今自分の罪を知つた。もう一生悪い事はしまい。この杖は焼いてしまはう』と眞實後悔してその杖を火の中へ投げ込んしまひました。魔法杖がすつかり灰になると共に、急に彼の羊がブルくと身ぶるひしたと思ふと元の次男になりました。

木樵はあつと驚きました。この時豚小屋の方で次男だと思つて『おい、起きろ。起きろ。順禮は羊になつたせ』とゆすぶりますと、順禮はびっくりして起き上りました。その顔を見たとたん。木樵はあつと云つて杖を取りおとしました。次男だと思つたのは順禮で、羊にしたのは次男でしたもの。順禮も驚いてあたりを見廻しましたが、隣の寝臺に羊が居るのを見てびっくりしてその家をと

木樵親子はそれからは正直な人間になりました

# 第廿五回京阪神聯合保育會提出遊戯の歌曲

▽京都保育會

(一) 鳩捕へ (散步唱歌の譜)

歌詞

一、圓い窓からぱッぱッぱッ

白鳩黒鳩茶色鳩

一度に捕ふて下りて來い

皆とお庭で遊びませう

二、可愛い鳩よぱッぱッぱッ

褒美に此豆あげませう

食べたら仲よく巣に歸れ

あしたも亦々遊びせう

遊 戲 準備 (一列圓形、半數は)  
中に入り鳩となる)

圓い窓からぱッぱッぱッ

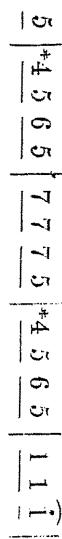
(二人相對し両手を繋ぎ外方の手を下げ内方  
を上げ窓の形を作る)  
(鳩は窓より顔を出しぱッぱッぱと領ぐく)

可愛い鳩よぱッぱッぱッ  
(子供は拍手なしつゝ外向圓形となる)  
(鳩は子供に近づく)

白鳩黒鳩茶色鳩 (窓の形を作れる子供は外方に飛ぶ)

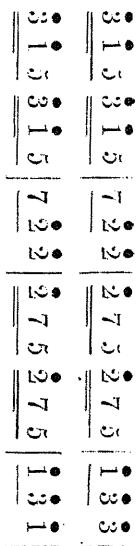
一度に捕ふて下りて來い (子供は拍手、鳩形)  
皆とお庭で遊びませう (は飛び下りる形)

ハ調 (オシク)



(鳩は躊躇みて静かに歩む、子供は鳩を追ひつゝ歩む)

(早タ)



二廻繰返す

(～調二拍子) 曲 歌

3.3.1 | 2.1 6.5 | 1.2 3.1 | 2.0 | 3.3 3.3 | 5.3 2.1 | 2.1 6.5 | 5.0 |  
 チフハウレシイ オマツリ ヨ アレアレタイコノ オトガスル  
 5.5 5.5 | 6.6 6 | 5.3 2.1 | 2.0 | 3.3 1.1 | 2.1 6.6 | 5.1 3.2 | 1.0 |  
 オギヨーレツモミエダシタ ハヤクーミンナデガガミマセウ  
 1. — | 1. — | 1. — | 1. — | 5 3 | 5 3 | 5 — | 5 — |  
 ドン ドン ドン ドン ピー ピー ピー ピー  
 5 6. | 5 6. | 5 6. | 5 6. | 3 — | 5.0 | 3 — | 5.0 |  
 チリン チリン チリン チリン ケン チコリン ケン チコリン  
 1. 6 | 1. 6 | 1. 6 | 1. 6 | 1. 6 | 1. 6 | 5 | 1 |  
 ワッサイワッサイ ワッサイワッサイ ワッサイワッサイ ワッサイ

(二) お 祭 り

褒美に此豆あげませう (子供は豆をやる形)  
 鳩は食べる形  
 食べたら仲よく巣に歸れ (子供は窓の中に入る形)  
 鳩は巣の中に入る形を作ら  
 あしたも亦々遊びませう (子供と鳩は互に禮)  
 をなして交代する

今日は嬉しいお祭よあれ～太鼓の音がする

お行列も見えだした早く皆でお拜みませう

ドン～～～

ピイ～～～

チリン～～～

ケンチコリン～～

ワッサイ～～～

遊 戲 準備 (め行進の用意をなす)

今日は嬉しいヨリ  
皆でお拜みませうマデ (唱ひながら一)

太鼓 (兩手を握り太鼓を打)

笛 (兩手をなしつ、歩む)

金棒 (兩手を軽く握り金棒を)

劍鉢 (引く形をなしつ、歩む)

チリン (兩人にて笛を吹く)

チコリン (兩人にて鉢を持つ形をなす)

ワツサ (ぶをなしつ、圓外に去る)

▽大阪市保育會

お 馬

お馬ひんくばかくとべよ

山でも岡でも一とびに

とび越えく勢こめて

進めよ／＼日本のお馬。

ハ調二拍子 (大正幼年唱歌第一集一九頁)

|      |      |      |     |         |         |         |
|------|------|------|-----|---------|---------|---------|
| 5    | 6 5  | 3    | 1   | 2.2 1 2 | 3 3 2 0 |         |
| オ    | ウマ   | ヒンヒン |     | バカバカ    | トベヨ     |         |
| 3.3  | 5 6  | 5.5  | 1 6 | 5.6 5 3 | 1       | 0       |
| ヤマ   | デモ   | オカ   | デモ  | ヒト      | トビ      | ニ       |
| 2.3  | 2 1  | 2.3  | 2 1 | 2.1     | 2 3     | 5 6 5 0 |
| トビ   | コエ   | トビ   | コエ  | イキ      | ホヒ      | コメテ     |
| i.i  | 6 5  | i.i  | 6 5 | 3.3     | 2 5     | 3 1 1 0 |
| ススメヨ | ススメヨ |      |     | ニホンノ    | オウマ     |         |

- 一、二列縦隊(男兒は内側女兒は外側)をつくり通常行進にて圓形をつくる(但し各組凡一間位の間隔を置くこと)

二、禮を終りピアノの合図によりて男兒は其位置に留まり女兒は馬を作るべき木製煉瓦を運び女兒協力して木馬をつくる(但し女兒の木製煉瓦運搬は一度に五個宛とし三回に運び終るものとす)。

三、木馬を作り終れば早き者より順次二列縦隊にならびピアノによりてスキップを成しつゝ馬の周圍を一週し合図によりて男兒は各自己製作の馬に乗る此時女兒は日の丸の旗を取り來り組合となりたる男兒の許に立つ

四、女兒は旗を肩にして唱歌し後スキップによりて其のまはりを一週す此時男兒は馬の唱歌を勇ましく歌ふ元の位置にかへれば合図によりて男兒は靜に馬より降りて女兒の右に列び禮をなす

合圖によりて女兒は直に旗を元の位置にかへす  
五、ピアノの合圖によりて男女兒協力して自己の

馬に用ひたる木製煉瓦を最初の位置へ持ち歸り  
第一節の如き二列縦隊を作りて此遊戯を終る

一、細い雨がざあ／＼

さら／＼ざあ／＼雨が降る

可愛い小鳥が羽ひろげ

傘もさゝず飛びまはる

二、亞鉛の屋根にてん／＼

軒の雨滴とん／＼

てれ／＼とん／＼雨が降る

天の神様賑かに

琴や太鼓で囃される

三、高下駄はいてこと／＼

低下駄はいてびしょ／＼

こと／＼元氣よく

雨は止まずに降つたとて  
かうして毎日参りませう。

上體を稍々後に目は上を見る(手は腰)後

半にて左足を後に引きつま先を付け踵を

上げ體は稍々前方に傾く第二節にて三歩

前奏 前半出してひとつこめて二回

(準備 右向 一列圓形)

第一節前半にて左足を前につま先を上げ

## 雨

ヘ調二拍子

|                         |             |                 |                 |
|-------------------------|-------------|-----------------|-----------------|
| 5 5 3212                | 3 5 . 5     | 5 5 3212        | 3 5             |
| 6. 6 5 2                | 5434 13     | 1 1 1 1         | . 5 3           |
| 3 5 5                   | 3 5 5       | 2 2             | 2               |
| (ホソ イの ゲタ<br>とたか タカ)    | アメ やハイ      | かに テ            | サ (ラン<br>テコト)   |
| 1 3 3                   | 1 3 3       | 6. ザ アン<br>とビショ | 6. ザ アン<br>とビショ |
| 5 12 32                 | 5 3 0       | 5 32 36         | 5 ル 置イ          |
| ・ サラーラー サラ<br>でんとコト     | ザ アンと<br>トコ | ア め ん<br>ア め ん  | ・ ゲ に テ         |
| 1 23 52                 | 3 5 5       | 3 21 62         | 1 ル る ウ         |
| カハーハー イの カ<br>てんんハヤ アメー | トミ マ        | ネギツ ハに フ        | ハレ ベ            |
| 5 12 321                | 2 5         | 3 6 5. 5        | ビ や イ           |
| カサーサー サー サ<br>とウ        | モ マニ        | ト は バ           | ハセリ             |
|                         | ニ デ ニ       | ズ ニ イ           |                 |

前進 第三、四節は右足にて同じ事をなす

琴や太鼓ではやされる（右向左右交）  
々舉手跳躍

後半全體圓心に向ひ手を繋ぎ三歩前進もとの位置に返り足踏手を下す。

一、細い雨が（圓心に向ひ直立）

サラ／＼（兩手を以て雨の静に）

太い雨が（圓心に向ひ直立）

ざあ／＼（雨の勇しく降る形を）

さら／＼ざあ／＼（前節の反復）

雨が降る（拍手）

可愛い小鳥も羽ひろげ（右向ヶ兩手）

傘もさすに飛びまはる（横ニ上グ）

てん／＼（兩手を前に出し掌を下に）

軒の雨たれ（圓心に向ひ直立）

とん／＼（其場に跪きてん／＼）

てん／＼とん（前節反復）

雨が降る（拍手）

天の神様賑かに（右手を高く指）

間奏 同前

三、高下駄はいて（手ヲ腰ニ上げ右向）

コト／＼（高足二回）

低下駄はいて（其の姿勢にて靜止）

ビショ／＼（すり足二回）

コト／＼元氣よく（高足四回）

雨はやまずに降つたとて（通常行進）

かうして毎日まわりませう（同）

### △神戸市保育會

手まりの歌（明治三十八年六月當市より本會へ提出の歌再記）

一、白いからだにきるもののは

赤樺黃にみどり青

そうしても一つ紫で

私のてまりは美しい うつくしい

少しのかどもふちもない

そうしてみがるでよく動く

私のてまりはあいらしい あいらしい

## (ヘ調二拍手) 六つの球

5.5 5 | 3.3 3 | 1.1 1 | 5.5 5 | 5.5 1 2 | 3 3.3 | 5 3.1 | 2 2 2 0  
 ヨイ・ヤ・サ ヨイ・ヤ・サ ヨイ・ヤ・サ ヨイ・ヤ・サ フレベル センセイノ 六ツノタマハ

5.5 5 | 3.3 3 | 1.1 1 | 5.5 5 | 5 1.2 | 3 3 | 5.5 3 1 | 2 3 1 0  
 ヨイ・ヤ・サ ヨイ・ヤ・サ ヨイ・ヤ・サ ヨイ・ヤ・サ ニジノヤウナ キレイナイロデ

2.2 2 | 5.5 5 | 1.1 2 | 3.3 3 | 5.5 5 5 | 3.3 2 1 | 3.3 2 1 | 2 2 2 0  
 ヨイ・ヤ・サ ヨイ・ヤ・サ ヨイ・ヤ・サ ヨイ・ヤ・サ マルクテ カルクテ ヨクヨク ウゴク

5.5 5 | 3.3 3 | 1.1 1 | 5.5 5 | 5.5 1 2 | 3 3 | 5.5 3 1 | 2 3 1 0  
 ヨイ・ヤ・サ ヨイ・ヤ・サ ヨイ・ヤ・サ ヨイ・ヤ・サ オトサヌ ヤウニ オワタシシマセウ

一、よいやさ／＼／＼（右手に球を持ちて高く掲げつゝ、中心に集まる）  
 フレベル先生の六つの球は(元の位置にかへる)  
 よいやさ／＼／＼（球の糸を左手に持かへて高く上げつゝ、中心に集まる）  
 虹のやうなきれいな色で(元の位置にかへる)  
 よいやさ／＼／＼（球を右手に持ちかへて掌を互に上下しつゝ、球を軽くうつまるくてかるくてよく／＼うごく（同上になしつゝ、一回まではる）  
 よいやさ／＼／＼（両手にて膝を打つ）  
 おとさぬやうにおわたししませう（同上最後ニ右手ニ持タル球ヲ右隣ノ幼兒ノ左手ニ渡シ左手ニハ右ノ幼兒ヨリ球ヲ受ク）  
 右終り幼兒は其球を握り右手にて十まで數へて手を伸ばし大きく圓く動かし終れば合図により二三歩前に進みて其球を出来るだけ高く抛げあげてもとの位置に歸り合図により其球を一個づつ拾ひ次には左手にて同一の運動を繰り返し再び高く抛げ上げて又合図にて拾ひ取れば赤旗黄緑青紫の旗の下に各兒集合して各小圓を作りし後手まりの歌を歌ひつゝ行進を始めて順々に大なる圓に復す

方 法 (各自六色の球一個づゝ右手に持て)  
 行進

が勝なり。  
二組に分れて互に圓を作り摸擬すべき物の名を定め歌の終りまで拍手し兎にても汽車電車にても凡て其物の特徴を捕へて摸倣しつゝ互に其場所をかはる、換りたる後は早く圓を作りたる方

## 方 法

(=調二拍子) 宿 が へ

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 3 | 3 | 5 | 3 | 3 | 5 | 5 | 3 | 1 | 2 | 5 | 5 | 0 |
| ウ | サ | ギ | ウ | サ | ギ | オ | ヤ | ド | ヲ | カ | ハ | ロ |   |
| 6 | 7 | 1 | 6 |   | 5 | 3 | 1 | 2 |   | 3 | 3 | 2 | 5 |
| オ | ヤ | ド | ヲ |   | カ | ハ | ル | ハ |   | ハ | ヤ | イ | ガ |

うさぎく  
お宿をかはるは  
早いがかちよ  
青き葉をゆする。  
空は屋根のかなたに  
かくも静かに、かくも青し。  
樹は屋根のかなたに  
打仰ぐ空高く御寺の鐘は  
やはらかに鳴る。  
打仰ぐ樹の上に鳥は  
かなしく歌ふ。  
ああ神よ。質朴なる人生は  
かしこなりけり。  
かの平和なる物のひびきは  
街より来る。

君、過ぎし日に何をかなせし。  
君今こゝに唯だ嘆く。  
語れや、君、そもそも若き折  
何をかなせし。

## 無題 (ボオル・ヴエルレン)

# 關の西より（二）

楓 二 子

私の筑紫行、それは岡山に於ける折井園長さんとの會見の舞臺面で終りであります。

折井園長さんは數年前から御厚誼にあづかつてゐますので何となしに心丈夫に岡山で一泊する事にしまして夜九時頃ステーションにつきました。

園長さんがわざく御迎ひ下さいましたのには只感謝の涙が思はず流れました。

旭東幼稚園を翌日訪問いたしまして主席の保母の方や太田保母の御熱心な觀察やさては折井園長さんが長年の御研究である遊戯の種類調査や、談話材料、理科的材料の調査整理などをみせて戴きました。

岡山には折井園長の御指導の六園の外に御熱心な岡保母の在らつしやいます幼稚園があります。

私は日數や用事の都合で次の時にしましてそのままで岡山市に別れをつけました。否え私は可愛い幼児と近き將來に再び相合ふ事を約してお別れしました。

中國の中堅、岡山市に更に一つの新しき努力と熱誠の焰が生んだ一つの彩雲の高く遠近より仰がるゝ日の一日も近からん事を祈ります。

必ずや私は近き日に於て和衷協同の美しき質のなるのを信じてゐます。

第二十五回京阪神三市聯合保育會は小雨そぼふる六月九日神戸高等女學校にて開かれました。

私が参りました時は少し遅れましたので丁度私の尊敬する檜崎先生の「感情作用を手段としての

「幼兒教育」の御講演の始つた處で御座いました。

私は面白く有益に拜聴いたしました。

忘れられてゐた、むしろ卑められてゐた感情は實に身體の養護と至大の關係のあることを今更の様に感じました。

DARWINのTHE EXPRESSION OF THE EMOTIONS IN MAN AND ANIMALS や此頃のCANON OF BODILY CHANGES IN PAIN HUNGER FEAR AND RAGE を讀んでみますと猶更に強く感ぜられます。主智的でなく情意的に教育されるべき時代の幼兒である以上は實際に感情といふ事は一時も忘れられぬ事であるとつくづく考へられました。

研究題に移りましてから「幼兒ニ文學ヲ教フルノ可否」といふのに對して京都の姫宮保母の御説明があり大阪神戸と研究發表や意見やが交換されました、結局次會までの宿題となりました。

「教フルノ可否」私は可否決定の前に十分の研究

調査が願ひたいのです。實際に基いて幼兒の現在生活に於ける文字は如何なる程度に理解されてゐるか、或は更にそれ以上に幼兒の文學に對する心的傾向を觀察實驗した上で一つの根據をつくつてそして敷へてみてその結果（勿論身體上にも精神上にも及ぼす）をも觀た後に此可否を決定したいものであるとひとりで考へました。

長い間の年と月と日との後にでもよろしいです此可否が一つの根據の上に決定されん事を今も私は望んでやまないので御座います。

中食の時に常に私共を可愛がつて下さる望月園長さんが呼んで下さいましたので御傍で御飯をいただきました。

午後幼兒の注意の研究發表や意見等が御座いました。十分間談話には大阪の木村中大江幼稚園主席保母の御話がほんとに生きた經驗談の様にうかがはれましてうれしく感ぜられ又日々私共の様に幼兒と遊ぶものの心には一種の言ひ知れぬ、反省を

促しました。

いろいろの遊嬉の交換が終る頃私は篠つく雨の中を車の幌にかくれて斯様な事を考へ乍ら三宮に着きまして列車の人となりました。

私の車中で考へました事といふのは、此日本で有名な唯一の大會である三市聯合保育大會が此上

更に盛大になつて一面に於ては十分の根據ある研究調査の發表や更に一面に於て尊い生きた多くの経験ある保母のゆかしい然も嚴かな御意見や経験談が聞かれる様な會として長く進んで行かん事を祈りました。よく他の會合には見られますが輕薄な何等の研究も準備もなく唯の場あたり的の意見や發表には只其時的一部の人々が歓迎して拍手をするかも知れませぬが然し眞摯なる誠實なる教育者といふ自覺ある保母は必ずや悲しむであります。

然し今度の保育大會にはそんな分子が見出されませんでした事を心よりうれしく思ひました。

日一日と進みゆく此大會の前途を祝福しつゝ梅田にかへりましたのは薄暮であります。

○

七月の空の降りみふらすみのとある朝、梅田驛の下り列車に一群の若元氣にみちた保母の一團がありました。

行く先は神戸幼稚園の此頃の新しき試みを參觀せんとする研究心の漲ぎつてゐる人々でありました、私はその一群の中に加はつて八時半頃に神戸幼稚園につきました。

參觀といふもの、常に私共は新しい奇しい事には只醉ふた様な氣分になるか、さなくばたゞ無下に破れ草履でもする様にたゞ一片の批評を下してそれきりにする傾きのあるものです。此傾向は私の様な経験の少ない確固たる學識のないものにはあり勝の事であると思ひます。

其園の主義方針をよく了解して各々の場合に於ける保母が児童を取扱へる状態、材料、處置、誘

導法、それ等の事に對する細心の注意を拂つて後  
その批判には出來るだけの私といふ感情やいろいろの非純正である分子を除外して冷靜な理の斷定  
を下したいものであるといつも思ひます。

朝早くから幼兒の掃除が行はれました。

鎗が小やみになつた雨の間を縫うて全園にひくと幼兒は各自の部屋に入りました。

暫くして會集が面白く行はれて其後各組各種々の方法と種々勝手な時間で遊びが始りました。

或組では大工さんが始りました、大工さんといふ遊びは幼兒向の大工道具で梯子や鐵道線路のシグナルヤや旗などを作るのです。

少さい鋸や金槌や錐などが可愛い手で動かされます。

或組では染物やさん或組では澱粉製造或組では御客様遊び等が始りました。

元氣よく櫻がけで雨の晴れ間を庭で粘土細工をやつてゐるのも仲々に面白うございました。

其外自然物の觀察、自然物の寫生畫等もありました。殊に各部屋の壁に個性研究調査の各幼兒名の表がはらてあります。望月園長さんの御話によると此個性調査を基として個人的保育を行つてゐるさうがありました。

個人の能力を尊重した教育法の前には必綿密な個性の研究調査がなければならないと思ひます。

實際生活を教育の一手段として取るのも、或は又其外の唱歌だとか談話の様なものを取るものただ到達すべき目的に對する一の手段であると私は思ひます。たゞそれ等の手段の基礎にはどうしても「幼兒現在の生活本位」といふ事を保母が忘れない様にするのが最大切な事だと考へられました。

元氣のよい若い同園の保母、それ等の人に対する善き牧羊者である望月園長、私は此熱心なる研究心の強い然かも私を一切すて、公の爲に夜も日も盡さる、望月先生の御心と其先生の教育方針の徹底に盡せ、若き教育者達の御活動振りに少なか

らぬ尊敬の念と一種の感謝の心が起りました。

CICERO は「幼き者を教導するといふ事は我々が行ふ國家に對する仕事の内の最大且最良のものである」といつた事を今新しく想ひ出しました。

○

神戸の保母方々は月に一回會合を催されてゐます。勿論望月神戸幼稚園長、榎本兵庫幼稚園長、仲尾楠幼稚園長等を中心として種々の御研究や意見の交換やさては新任又は轉任の御挨拶やすべてが家庭的に出來てゐるさうでした。

七月五日は丁度七月の其會が開かれるといふ御話を聞きましたので私も一度其美しい會合の中に加はつて冷えんとする心或は家庭的暖みから俗化せんとする感情に對して活ける水を與へて戴きたく其席末をわけて戴きました。

此日は丁度大阪から竹村一氏が望月園長の御同伴にて御來會なされ「幼兒の生活本位の教育」についての約一時間ばかり御話がありました。

教育といふものは人と人の生活せる者の交渉であるといふ事から現代の思潮と幼兒教育について具體的な御話を交へ乍ら面白く拜聽いたしました。

次に望月園長の個性研究學上的方法及注意についての經驗と理論とを明細に黒板に御示し下さつてよく解る様に御話がありました。

最後に仲尾園長が一つの福音を御傳へしますと胃頭に置いて九月秋冷の候になれば私共が最も尊敬する谷本博士のトラモンド夫人の著書についての御講演を連日四五日開催する事にはゝ確定しましたとの事を申されました。

其後で茶菓が出ました。その時に圓く白いテーブルを圍んだ四十人餘の國家の教育者が美しいあるものを中心にして胸襟を開いて互に話會ひ其間に新任の御挨拶やら退職の御挨拶など美しく交換されました。

五時が鳴ると此會の規則ださうで當日會長であ

りました平安幼稚園長鹽見保姆がやさしい御聲で閉會の辭がありました。

私はこの少さい或人が見れば何でもない様な會でありますが然し私は斯う云ふ一致協同和衷相愛の家庭的關係がたしかに神戸保育會の過去は勿論の事、現在も將來をもただ向上一路に導いて行くんだといふ事を痛切に感じました。

「悦びと愛とにすべては生れて行く」と印度の哲

人は云ひました。

愛それはすべての活動も向上もあらゆる建設の中心であります、憎<sup>にくみ</sup>それはギリシャの古代の哲學者でなくとも私の様なものでも憎は破壊の端緒であると思ひます。

公を以て利を捨てゝ立てる望月園長を初め活動と熱心との仲尾園長方の謙遜と思慮深き榎本園長方々を中心にしてすべてが愛による神戸保姆會のかくれたる谷の姫百合の様なゆかしさを永くたもつて行かれん事を祈りつゝ平安園を去つた時は梅

雨晴のよき天氣になつてゐました。空ばかりではなく私の心までも…………。

雑録

○福田福子氏長逝

フレーベル會幹事福田福子氏は去月長逝せられたり、本會は謹んで哀悼の意を表す。

○本誌九月號の發行日

「婦人と子ども」第十八卷第九號は編輯の都合により一日の發行日を延期して九月十日に發行の豫定なり、右念のため讀者に稟告す。

\* \* \* \* \*

## 会 告

- 會費御拂ひ込みの節は名前は初め御入會の時の御名前へと御同一になし下され度く、假令ば初め幼稚園名にて御入會、後個人の御名前にて會費御拂込み等のことなき様必ず願上候。整理上甚だ煩雜致し候につき右特に御注意願候
- 會費未納は會計整理上甚だ困難致候に付確實に御納付下され度向後萬一御不納久しきに亘り候場合は乍遺憾雑誌發送を停止可致候間左様御含み置願候
- 會員諸君にて御轉居等の節は至急御一報願  
上候
- 萬一本誌不著等のこと有之候折は直に御一報煩し度候

### 本誌定價

一 冊 郵 稅 共 金 拾 叁 錢 六 冊 前 金 郵 稅 共 七 拾 貳 錢  
拾 二 冊 同 金 豈 圓 四 拾 四 錢 郵 券 代 用 一 割 増

### 購讀中込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂込み下さい。直に送本致します。(振替口座東京一七二六六番)

### 本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます

庶務及會計に關する御用務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會事務所宛

本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下代々木山谷一二四倉橋惣三宛

大正七年八月一日印刷納本  
大正七年八月一日發行

東京府豊多摩郡代々木村大字代々木山谷一二四

編輯兼發行者

倉 橋 惣 三

東京市本所區番場町四番地

印 刷 者

守 間 功

東京市本所區番場町四番地

印 刷 所

凸版印刷株式會社本所分工場

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内  
フレーベル會

發 行 所

# おまちかねの

土川先生著

## ◎律動的遊戯 第二集

定價金四拾五錢  
送料金貳錢

土川先生著

## ◎六色三體つなぎの理論と使ひ方

石版、彩色圖入でありまして之れに先生の實際的御研究になつた、繊切なる説明と理論を著述せられたものであります。旺盛なる律動遊戯がすんで静かに、美しい、六色三體を御使用下さい。

## ◎軍艦組立 定價金壹圓八拾錢

木品金三十六錢  
紙品金三十六錢

土川先生の御意見を伺ひ製造方法を改良し固形による御使用に對し最も適切に且つ御便利に出來てゐます。

木製(ムク)でありまして最も堅牢に出來てゐます、車が二個着いてゐますから、綱によつて曳く時は、恰も大海の海上を航行する様であります、而もこれが「マスト」「煙突」「大砲」「空氣入れ」などがパラパラに分解せらるゝ様になつて居ます、競走遊戯等に御使ひになる時は、二つなり三つなり遊戯場の向の方へ分解(別々或は纏めて置いて)して置きまして幾組かに分けた幼児を一、二ノ三で駆らしめその組々によりて一艘の軍艦を組立て先生の下まで早く到着することを樂しむのであります、軍艦といふことに就て海事思想を養ひ、組立てより思考力を養ひ視覚の練習にもなります。

元賣發品用保

館 ルベーフ

町番三町麹京東

○四六九一京東替振  
九〇九二町番電話